

文学を通して見るラテンアメリカの女性

——『精霊たちの家』の登場人物から——

山 蔭 昭 子

「どんな革命的な国でも、社会主義や他の国でも、「男性優位」は必ず存在しています。世界共通の病根といったところでしょうか。それに社会の一部となりきっていますから、ある面は改善し、ある面は消し去ることができたとしても、すべてをなくしてしまうことは恐らく不可能でしょう」¹⁾と、グアテマラのマヤ系キチェ族の女性で先住民族の権利擁護運動に対する貢献によって1992年度のノーベル平和賞を受賞したリゴベルタ・メンチュウは言っているが、ラテンアメリカ諸国において、「マチスモ」はとくに強力に社会を規定してきた要因である。

スペイン人によるインディヘナの征服、白人男性による先住民女性の征服に始まったラテンアメリカ世界においては、男女両性間の伝統的秩序は主として、マチスモとマリアニスモ、家父長的家族制度、カトリシズムによって規定されてきた。

「マチスモ」(machismo)とは、「ラテン・アメリカのメスティソ社会において男らしさを強調する言葉。マチヨ macho は雄を意味するスペイン語であり、男性の力、勇気、誇り、性的能力に言及する言葉であるが、ラテン・アメリカに入るとインディオ的解釈が加わり、植物や物の大きさ、状態、力、その他の属性における優位性をも意味するようになった。マチスモは男らしさを強調する生き方を意味し、メスティソ社会の価値観を代表する。ヨーロッパ地中海世界に共通にみられる、家族や社会的名誉をになう男らしさを重視する傾向が、主としてスペインを通じてラテン・アメリカに入り、定着したと推測でき

る」²⁾というもののだが、「マチスモ」と対をなすものとしての「マリアニスモ」(marianismo)とは、「聖母マリアへの信仰に由来する概念で、女性の精神的優越性にたいするあこがれと尊敬を表す。カトリックの伝統のもとに、聖母マリアに象徴される母性的なる女性のやさしさ、忍耐強さ、道徳性、包容力などが尊敬の対象とされる。グアダルーペの聖母はメキシコの混血文化の象徴であるとともに、ラテン・アメリカの守護聖女でもある。男性優位をあらわすマチスモに対してマリアニスモは抵抗し、あるいは相補いながら、性による役割分担を正当化してきた。男性の保護のもとに女性が家庭の内と外で大きな権利を持つ場合もあるが、一般には男性に対して従順で、男性の横暴を許し、家庭を守る女性が理想とされる」³⁾というものである。とりわけ男女の関係に暴力的要素を持ち込んだマチスモの伝統は、ラテンアメリカの歴史の中で単に男性優位だけでなく独裁制、大土地所有制、外国による支配と干渉、軍事政権などの権威主義的現象とむすびついた。それゆえ、ラテンアメリカにおける女性解放運動は、強者の論理としてのマチスモ的社会に異議申し立てを行うことであった。

では、このような状況の中でラテンアメリカの女性たちはどのように生きてきたのだろうか。ここでは、小説『精霊たちの家』(*La casa de los espíritus*, 木村栄一訳、国書刊行会、1989年)をテキストに採り上げて、そこに登場する女性たちの生き方に過去から現代にいたるラテンアメリカ女性の姿を重ね合わせて考えてみたい。

I

作者のイサベル・アジェンデ (Isabel Allende) は1942年生まれのアチリの女性作家で、ベネズエラに亡命中の1982年にこの作品を発表した。1970年に世界史上初めて選挙によって成立したアチリの社会主義政権の大統領だったサルバドル・アジェンデを叔父に持つ作者は、自らも政権の誕生からピノチェト將軍の軍事クーデターによる政権崩壊までを身近に経験している。この作品の本

文中には物語の舞台がチリであるという記述や具体的なチリ国内の地名への言及はまったく行われていないが、作品を読めば19世紀末から1973年のチリ軍事クーデターまでの約一世紀のチリを舞台に物語が展開されていることは明らかである。スペインで出版されるとすぐに大きな反響を呼んだが、軍事政権下の故国チリでは発禁で、人々はコピーを回し読みしたという。やがて国際的な批判の前に軍政府も発禁処分を撤回したといういきさつがあるが、現在では世界中で15カ国語以上の言語に翻訳されている。また、本書は映画化されて、『愛と精霊の家』という邦題で日本でも公開された。

この作品は邦訳で1ページ2段組みで400ページ以上におよぶ長編小説で、エステーバン・トゥルエバという男の一生を通じて語られる一族の年代記であるが、物語が展開されて行く過程で、前述のマチスモ、家父長的家族制度、カトリシズムが両性間の伝統的秩序をいかに規定するものであったかということが確認できる。

エステーバン・トゥルエバは植民地時代のリマで屈指の名門に生まれた母親を持つが、父親が財産を蕩尽して死んだために一家は零落し、少年時代の彼は寒さをしのぐ満足な衣服も持たず、仕方なく胸と背中に新聞紙を入れて学校に通ったが、歩くたびに新聞紙がかさかさとして音をたてるので、クラスメートにその音を聞かれるのではないかとおびえて暮らすほど貧しい境遇にあった。爪に火を灯すような暮らしを送っていたエステーバンは、あるとき街でデル・パージェ家の長女でこの世のものとも思えぬ美しい娘ローサを見かけて一目惚れし、求婚する。ローサとの結婚に備えて金を作るため、一攫千金を夢見て彼は北部の鉱山へ金鉱を求めてでかける。休む暇もなく働き通してやっと金鉱を掘り当てた時は、ローサが父親の身代わりに毒殺されたという知らせが届いた時だった。落胆したエステーバンはローサの葬儀のあと鉱山には戻らないで、トゥルエバ家の農場ラス・トレス・マリーアスに行き、そこで荒れ果てていた農場を立て直し、小作人たちの生活を改善しようとする。だが農場主の彼は傍若無人に小作人やインディオの娘たちを次々と暴力で言うことをきかせては、彼

女らに大勢の子どもを産ませるが、その子どもたちを自分の子どもとして認めようとはしなかった。やがて農場経営も軌道に乗り、心安らぐ家庭と嫡出子がほしくなったエステバンはデル・バージェ家の末娘でローサの妹クララと結婚する。子どもたちが生まれてからは、農場経営から他の事業にも手を広げて成功を収め、彼は大実業家になって行く。その後は政界に進出して、保守派の国会議員として国中で知らない者はないまでに成り上がっていった。しかし、妻クララの死を境に彼の生活に影がさし始め、人々が集まらなくなった彼の屋敷は荒廃し始める。その後、国内の政情不安からクーデターが起り、国会議員であった彼も軍市政権の前には何の力も持たない孤独で無力な老人であることを思い知らされる。最後は、秘密警察に連行されていた孫娘アルバの帰還に安堵して死を迎える。エステバンは一族の長で、ラテンアメリカの家父長制の具現者、支配し抑圧する者、女性に敵対する者、マチスモの権化として描かれている。以上のように物語の筋だてを追えば、エステバンの生涯の出来事が語られているということになるのではあるが、年代記を構成するそれぞれの章やエピソードはラテンアメリカ社会の歴史の変遷過程を、誇張やデフォルメなどの巧みな文学的手法を用いて読者の前に示してくれるのである。そしてこの年代記には過去から現代にいたるラテンアメリカの女性の姿がエステバンの妻クララ、娘ブランカ、孫娘アルバという三代の女性やその他の女性を通して描かれており、エステバン・トゥルエバはむしろ狂言回しの役割を果たしていると見なすことができる。

II

『精霊たちの家』には多くの女性が登場するが、実際にラテンアメリカの女性たちが生きたように彼女たちも自らの置かれた環境の中でさまざまな生き方をしている。それらの女性について見てみよう。

ローサ

第1章のタイトルにもなっている美女ローサは、「生まれ落ちた時から、陶製の人形のようにしわひとつないすべすべしたまっ白な肌をしており、髪の毛は緑色で、目は黄味がかったが、彼女を取り上げた婆さんはそんなローサを見て思わず十字を切り、このお子さんは原罪このかた地上で生まれた中でも、いちばん美しい方ですよと叫んだ。」⁴⁾ ローサは「人魚のように美しく育った。彼女の青味を帯びた肌や髪の毛の色、優雅でおっとりした物腰、もの静かな性格を見ていると、海の住人としか思えなかった。あれで鱗のついた尻尾が生えていたら、まさしく本物の人魚だった。むろんちゃんとした脚が二本ついていたので人間にはちがいがなかったが、それでもやはりあの神話の生き物を彷彿させた。」⁵⁾ 第1章で美女ローサがこのように神話的な雰囲気をもった人物として描写されていることで、この物語は百年間の年代記にとどまらず、さらに長いラテンアメリカや世界全体の始まりからの歴史に重ね合わせられているような印象を読み手に与える。実際には百年という時間単位を扱いながら、ラテンアメリカ世界の歴史は言うに及ばず、聖書の創世記から黙示録までを想起させる作品に、ガルシア・マルケス (García Márquez) の『百年の孤独』⁶⁾があるが、『精霊たちの家』が『百年の孤独』のエピゴーネンであるという評価を批評家たちから下されたりしたことがあるのもこういった類似性によるのかもしれない。ローサはまた聖母マリアを想起させる。天使のように清らかで無垢なローサは、男たちの願望に合わせて作られた理想の女性像なのである。彼女は自らの確固たる意志を持たず、すべてに受動的で運命に身を委ねるだけの女性だった。これはマリアニスモに囚われて、歴史の中で長い間女たちが甘んじなければならない生き方だったのである。

ニベア・デル・バージェとドーニャ・エステール

ニベア・デル・バージェはローサやクララの母親で、15人もの子どもを産み、大家族を切り盛りするたくましい女性である。国会議員になりたいという政治的野心を抱く夫を助け、自らも女性の参政権獲得のための運動を熱心に

行っている。チリで女性の参政権が成立したのは1949年であるが、それより半世紀以上も前に、女性の権利獲得のために男たちからだけでなく女からも嘲笑されながら、ニベアは信念を持って行動した。19世紀末の女性を取り巻く環境は現代では想像もできないほど制約的であったが、彼女はそんな中でめげずに精一杯生きようとしていた。

一方、エステーバンの母ドーニャ・エステルはニベアと同じ時代を生きた女性だが、男性に振り回されながら従容として受け身に生きた姿はニベアとは対照的である。ドーニャ・エステルは「家系は植民地時代のリマでも屈指の名門だった〔中略〕ドーニャ・エステルがトゥルエバと結婚したのは、言ってみれば事故にあったようなものだった。彼女は同じ階級の相手と結婚することになっていたが、何をまちがえたのか移民の二世であるあのやくざな男にのばせあがってしまったのだ。わずか二、三年であの男は彼女の持参金を使い果たし、そのあと遺産まで蕩尽して」⁷⁾しまい、アルコールと愚行に走って身を持ち崩し、あげくの果てに死んでしまう。あとに残された彼女と家族は窮乏生活を余儀なくされた。ドーニャ・エステルは晩年を病苦の中で過ごして死を迎えることになるが、死期が近い母を見舞ったエステーバンに、「わたしの血を引く孫が生まれて、その子がわが家の家名を継いでくれる、そうなれば、安心して死んでゆけるからね」⁸⁾と言う。彼女が生きて行くうえでの唯一の心の支えは、自分が名門の出身だということだけだったのである。自立する生活力や経済力を持たない女性が夫に死なれたり夫から捨てられたりした場合、その後の人生はドーニャ・エステールの境遇とたいして変わらないものであったし、現代でも程度の差はあれ、劣悪な環境で生きている女性が多くいる。

フェルラ

エステーバンの姉フェルラは、「どこから見ても非の打ちどころのない女性だったので、人が彼女のことを聖女のようにと噂したのもむりはなかった。母親が病に倒れ、父親が亡くなって一家が貧乏のどん底に落ちこんだ時は、女手

ひとつで弟を育てあげたし、今は今で、わが身を犠牲にして母親に尽くしていたが、町の人たちはそんな彼女を親孝行な娘の手本としてよく引き合いに出したものだ。』⁹⁾ 婚約者ローサを亡くした弟のエステバンが新しい生活を始めようとトゥルエバ家の農場へ赴くときに、彼女は「わたしも男に生まれてくればよかった。そうしたら、いっしょに行けるのに」¹⁰⁾と言って、女に生まれてきたことを嘆く。一方では、教会の司祭の言う通りに、したいこともせず、家族や周りの人につくし、人のいやがる努めを果たせばきっといいことがあるに違いないと信じて耐えていた。彼女は母親の看病のために結婚も諦めて一生独身を通す。弟が結婚してからは彼ら夫婦の小間使的な役割を担い、さらに姪の誕生後は姪の世話係に甘んじて、弟の家に住んでいたが、結局は手塩にかけて面倒を見た弟に疎まれ、弟と喧嘩をして家を出て、孤独のうちに死を迎える。報われることのない一生だった。フェルラと同様の人生をおくった女性は多い。ラテンアメリカではほとんどの人々がカトリック教徒であるが、キリスト教がラテンアメリカ女性の行動を規制する大きな要因になっていたことがフェルラの姿を通して読み取れる。

他のラテンアメリカ諸国では法律で離婚が認められているにもかかわらず、チリはいまだに離婚が認められていない唯一の国であるが、そのチリで筆者はカトリック教会の力をみせつけられるような経験をしたことがある。エイズ患者が世界的な規模で増え出したころ、チリでも1992年にエイズ予防に関する一連のキャンペーンがテレビ放送で行われていたが、その中の一つにコンドームの使用を勧めるものがあった。しかし、カトリック教会からの横槍で、キャンペーン放送のその部分は割愛されてしまったのである。この事実は一例にすぎない。カトリシズムは現代に生きる人々の生活にも大きな影響力を及ぼし続けているのである。

パンチャ・ガルシーア

パンチャはトゥルエバ家のラス・トレス・マリーアス農場の小作人のイン

ディオの娘である。ある日、「パンチャは馬の足音を聞きつけたが、男の前ではけっして顔をあげてはいけないという、一族の女たちが守っている古いしきたりに従ってうつむいていた。エステバンは馬の上でかがみこむと、薪木の束をつかみ、それを持ち上げて道の脇に乱暴に投げすてた。そのあと、腕を伸ばして彼女の腰のあたりをつかむと、獣のような唸り声をあげて彼女を引きずり上げ、鞍の前のところに座らせた。その間、彼女は少しも抵抗しなかった。馬に拍車をくると、全速力で川の方に向かった。ふたりは一言も口をきかずに馬から降り、互いに目で相手の出方をうかがった。エステバンが幅の広いベルトをはずすのを見て彼女は後ずさりしたが、彼はそんな彼女をつかみ、ふたりはもつれるようにしてユーカリの枯れ葉の上に倒れた。[中略] パンチャ・ガルシアは抵抗もしなければ悲鳴もあげず、まじまじと目を見開いていた。仰向けになり、おびえたような表情を浮かべてじっと空を見つめていたが、やがて相手の男が呻き声をあげて自分のそばに横たわるのを感じた。そのあと彼女は静かにすすり泣きはじめた。自分の前には母親が、母親の前には祖母が牝犬のように犯されたが、彼女も同じ運命をたどったのだ。エステバン・トゥルエバはズボンをひっぱりあげてベルトを締めると、彼女に手を貸して立たせてやり、鞍のうしろに座らせた。ふたりは家の方に戻って行った。彼は口笛を吹いていたが、彼女はまだ泣いていた。彼女を家まで送るとその口に口づけをした。〈明日からわしの家で働くんだ〉と彼は言った。パンチャはうつむいたままうなずいた。彼女の母親や祖母もやはり主人の家で働いたことがあったのだ。』¹¹⁾ エステバンの家で働くことになったパンチャは妊娠するが、彼はそのことをうとましく思い、パンチャを親の家に帰してしまう。ラス・トレス・マリーアス辺りでは、エステバンのせいで大勢の子どもが生まれるが、彼は生まれた子どもたちが自分の子であると認めようとはせず、良い家柄の娘と結婚して嫡出子を得るべく、再びデル・バージェ家へ求婚に出掛けて行く。

使用人の女性や娘に子どもを産ませておきながら自分の子として認めようとしない男たちは、マチスモが根強くはびこるラテンアメリカ社会では昔から後

を絶たない。植民地時代以来ラテンアメリカでは、身を守る術を持たない無数のパンチャが不幸な運命に泣いてきたのである。

Ⅲ

次に、物語の中心となるエステーバンの妻クラーラ、娘ブランカ、孫娘アルバという三代の女性の生き方を辿ってみよう。彼女たちのありようは、過去から現代への歴史的変遷の中で変化してきたラテンアメリカ女性の姿でもある。

クラーラ

作者イサベル・アジェンデによれば、クラーラは作者自身の祖母をモデルにしているそうである。クラーラは優しく聡明な女性で、空想の世界に住んで、精霊たちと話したり、透視したり、超能力で未来を予言したりすることもできた。エステーバンとの結婚後は首都にある屋敷に住んでいたが、ラス・トレス・マリーアス農場に行って、自分の居るべき場所はここなのだと気付く。彼女は農場内のいろいろな場所に赴いて、農場で働く者の妻や子どもたちに生活改善のためのさまざまな知識を与えたり、指導をしたりする。また、女たちを前に、女性の参政権の話や女性の地位向上についての話をする。しかし、農場の女たちは「男が自分の奥さんに手をあげるのはあたりまえのことですよ。もし奥さんを叩かないような旦那さんがいたら、その人は奥さんを愛していないか、だらしがないだけなんですよ。男の人は一家の主人として命令を下す立場にあるんですから、自分の稼いだお金や大地が生み出すもの、鶏が産みおとすものを自分のものとして取るのはあたりまえのことですよ。女には成り成りて足らざるところがあるわけですから、男のまねをしようとしてもむりな話です」¹²⁾と反論する。当時の女性の一般的な意識はこのようなものであっただろうが、それを聞いてクラーラは絶望的な気持ちに襲われる。夫エステーバンはクラーラが女たちを前に話したことを知って激昂するが、彼女は意に介さなかった。

大地震でエステーバンが身体中の骨を折って寝込んだのを境に、クラーラの

生活は大きく変化する。それまでは自分の好きなことをしていればよかったが、いまや動くことのできない夫エステーバンに代わって広大な農場の立て直しと経営、家事その他の仕事のすべてが彼女の肩にかかってくる。働くことで彼女は人間的に成長し、家族と農場にとってなくてはならない人間になっていく。あるとき、娘ブランカと小作人の息子で農民に労働者の権利について説いているペドロ・テルセーロ・ガルシーアが愛し合っていることを知って激昂するエステーバンに向かって、クララは言う。「ペドロ・テルセーロ・ガルシーアはあなたとおなじことをしただけですよ。[中略] あなただって、自分とちがう階級のひとりものの女性と寝たことがあるでしょう。あなたとちがうのは、あの人はブランカを愛しているってことですよ。ブランカもあの人を愛しているから、ああいうことをしたんですよ。』¹³⁾ 本質を指摘したこのクララの言葉に逆上したエステーバンは彼女をひどく殴りつけたので、彼女の歯が折れてしまう。クララは首都の屋敷に戻り、親しい人たちや訪問客に囲まれて陽気に振る舞うが、事件以後、死ぬまで夫とは口をきかなかった。沈黙は昔から自分を積極的に表現することが許されていなかった女性にとって、唯一の抵抗の手段だったのである。クララは社会運動にも積極的に関わり、夫を客観的に冷静に見て批判することもできた聡明な女性であるが、時代や社会という制約の中で、家父長制の束縛から逃れることはできず、完全な自立からは程遠かった。

ブランカ

ブランカはクララより奔放な生き方をする。農場の小作人の息子ペドロ・テルセーロ・ガルシーアと愛し合うようになるが、階級が違うという理由から父エステーバンに仲を裂かれ、お腹の子どもを父親を作って一家の体面を取り繕うために、他の男と無理やり結婚させられる。この結婚に失敗して、娘アルバを連れて屋敷に戻ったブランカは、ペドロ・テルセーロ・ガルシーアとの時折りのデートを楽しみに、人形作りで細々と自活して暮らし始める。彼女はペ

ドロからの再三の結婚申し込みも断って、ひとりで暮らす方を選ぶが、クーデター後は当局の追跡を逃れて亡命するペドロと一緒にカナダに行き、その地で幸せに暮らすことになる。

ブランカは父親に反抗し闘うことで階級至上主義、家父長制と闘った。また、彼女が最初の結婚に失敗した後ペドロからの結婚申し込みを受け付けなかったのは、愛し合う男性と結ばれるのに結婚という儀式・契約による保証など必要としなかったからである。これは女性の自立に伴う「家」の解体へとつながるものと見るができる。家父長制によって女性に押し付けられてきた純潔・貞淑・柔順等の伝統的な価値に反旗を翻すものであった。ブランカは完全に自立した女性ではないが、自分というものを主張し、自分の足で一步を踏み出した女性だと言えるだろう。

アルバ

ブランカの娘アルバは周囲の者の愛に包まれて幸せな少女時代を送り、大学では哲学と音楽を学び始める。法学部の学生ミゲルと愛し合うようになるが、彼は反体制学生運動の指導者だった。彼女は労働者のストを支持して大学の建物を占拠して立てこもった学生たちと行動を共にするが、それは政治的な信念からというよりミゲルを愛していたからだった。アルバは祖母や母にはなかった行動の自由も精神的な自由も享受していた。

しかしながら、クーデターが起こったとき、彼女の自由は軍事政権によって無残にも踏みにじられてしまった。彼女はミゲルの身を案じながら、当局に追われている人たちを匿ったり、その逃亡を助けたりしていたが、ついに彼女自身が秘密警察に連行される事態になる。そこで、彼女は繰り返し拷問とレイプを受け、早く死にたいと思うほどであった。しかも、彼女を凌辱したのは、祖父のエステーバンが小作人の娘パンチャ・ガルシアに産ませた子エステーバン・ガルシアだった。かつて階級社会の犠牲者であった男は、組織化された家父長制としての軍事政権の側から、かつての支配者の一族に復讐したのであ

る。

IV

軍事政権のもとで逮捕され、アルバと同じような目にあった女性は数多い。それは『精霊たちの家』の作者の国チリだけでなく、軍事政権下（1976～83）の隣国アルゼンチンやその他のラテンアメリカの国々でも事情は似通ったものだった。逮捕・連行されないために、ペドロ・テルセーロ・ガルシアとブランカのように外国に亡命を余儀なくされた人も多かった。筆者が1992年ごろにチリで知り合った人たちの中には、自身が外国から最近帰国したとか、家族や親戚が外国にいる、あるいは最近帰国したというケースが極めて多かったが、これは73年から90年まで続いた軍事独裁政権の弾圧によるものである。

アルバが秘密警察に連行されていたころ、実際に秘密警察で拷問を受けて死に瀕した夫を救うために命懸けで行動した女性がいた。筆者のチリ人の友人が語ってくれたのは、友人の知人で、夫が中学校教師をしている女性の話である。彼女の夫はクーデター後、秘密警察に連行されたいが、詳しい情報は全く得られないままだった。ある夜、ひとりの男から彼女に電話がかかって来た。男は次のように言った。「わたしはあなたの旦那さんのかつての教え子です。今すぐ彼を助けに行ってください。彼のいる場所にはキーのついた車がありますから、その車に彼を乗せて今夜中に県外へ立ち去ってください。彼を救う方法はそれ以外にありません。」彼女が車の運転はできないと言うと、男は電話でマニュアル車の運転の仕方を教えた。男が指示した場所に行ってみると、はたして拷問を受けて瀕死の夫が地面に放り出されていた。その横には一台の車があった。彼女は夫を車に担ぎ込み、生まれて初めて握るハンドルに夫と自分の命を託して、無我夢中で夜の道を北部の町までたどり着いた。それから20年後に筆者は彼女と顔を合わす機会があったが、彼女の身体のどこにそんな力が潜んでいたのかと思うくらい、穏やかな表情の物静かな女性だった。クーデター後の混乱のさなかでそんな経験をしたのは彼女だけにとどまらなかったであろ

う。

ラテンアメリカでは「政治的行方不明者」の問題も見過ごすことができない。「政治的行方不明者」というのは、反体制というレッテルを貼られた学生や知識人たちで、官憲によって逮捕・連行されて戻って来なかった人々のことをさす。当局に、彼らを返せと訴え続けた女性たちがいた。アルゼンチンの「五月広場の母の会」は、行方不明者である夫や息子や肉親の写真と共に抗議文を書いたプラカードを掲げて、週に一度ブエノス・アイレスの目抜き通りの五月広場をデモ行進した。¹⁴⁾ 同時に「行方不明者の家族の会」を組織して、情報の収集・交換・被害者の家族同士の連帯と助け合いの運動を展開して行った。チリやメキシコでも同様の運動が起こり、女性たちは人権侵害と闘い、社会変革を目指す運動にたち上がっていったのである。

『精霊たちの家』で作者イサベル・アジェンデが三代の女性につけた名前、クララ、ブランカ、アルバというのはそれぞれスペイン語で、明るい、白い、夜明けを意味する単語である。軍事政権時代の82年に出版されたこの作品に作者が託した希望が読み取れる。アルバはおどましく不幸な体験をしながらもいい時代が来ると信じていた。チリでは90年に、アルゼンチンでは83年に民政移管が行われ、夜明けが訪れた感はあるが、ラテンアメリカの女性を巡る状況はまだまだ厳しい。

注

- 1) エリザベス・ブルゴス『私の名はリゴベルタ・メンチュウ』、新潮社、高橋早代訳、1987、p. 281
- 2) 『ラテン・アメリカを知る事典』、平凡社、1987、p. 403
- 3) 同書、p. 412
- 4) イサベル・アジェンデ『精霊たちの家』、国書刊行会、木村栄一訳、1989、p. 10
- 5) 同書、p. 10
- 6) ガブリエル・ガルシア＝マルケス『百年の孤独』、新潮社、鼓直訳、1972
- 7) イサベル・アジェンデ『精霊たちの家』、国書刊行会、木村栄一訳、1989、p. 51

- 8) 同書、p. 88
- 9) 同書、p. 48
- 10) 同書、p. 51
- 11) 同書、p. 62
- 12) 同書、pp. 106－107
- 13) 同書、p. 197
- 14) ルイス・ブエンソ監督のアルゼンチン映画『オフィシャル・ストーリー』（1985）に詳しく描写されている。

[本稿は2000年7月7日に神戸女学院大学女性学インスティテュートで行った講演に加筆・修正を行ったものである。]

Sumario

Imagen de mujeres latinoamericanas en la literatura

—Mujeres en *La casa de los espíritus*—

Akiko Yamakage

En la sociedad latinoamericana, desde hace mucho tiempo, los factores que definen el orden convencional entre los dos sexos serían principalmente el machismo y el marianismo, el sistema patriarcal de la familia, y el catolicismo. El machismo, sobre todo, se unió con la dictadura y ha reprimido a las mujeres en la historia. ¿Cómo vivieron y viven las mujeres latinoamericanas bajo esas condiciones?

En este trabajo, quisiera a partir del análisis literario identificar la “manera de ser de las mujeres” en ese contexto, desde el pasado hasta el presente, a través de las imágenes que se describen en la obra literaria. Utilizando como texto *La casa de los espíritus*, novela de la escritora chilena Isabel Allende, quisiera tratar de analizar a los personajes femeninos teniendo en cuenta también los relatos de mujeres latinoamericanas que fueron protagonistas reales de esa época.